

小説篇

行間さん	河内仙介	2
祝煙	和田芳恵	25
遺児	上林暁	48
祝辞	佐多稲子	63
赤魔	倉阪鬼一郎	77
青いインク	小池昌代	86
「芙蓉荘」の自宅校正者	川崎彰彦	101
爐邊の校正	田中隆尚	141

わが若き日は恥多し	木下夕爾	164
で十条	吉村昭	168
校正恐るべし	杉本苑子	171
アララギ校正の夜	杉浦明平	176
校正	落合重信	186
植字校正老若問答	宮崎修二郎	189
助詞一字の誤植 横光利一のために	大屋幸世	193
正誤表の話	河野與一	199
【解題】収録作品を読む／編者・高橋輝次		203
底本一覧		227
執筆者紹介		228

## 爐邊の校正

田中隆尚  
たなかたかひき

校正とはロオマの奴隷の石運びのようなものだと思はれては、多分目立たないしごとに対する思いやりにすぎなからうと思つた。實際私は月々ももんがという同人雑誌の校正をやっているが、しごとそのものをそれほど苦労に感じたことはない。ただ校正をしている作品が私自身の評価ではどうしても没書にした方がよいと思うのに、紙面の都合とか出資者に対する義務とかにしばられてのせなければならなくなつた時、その校正をしていると嘔吐をもよおすような本能的嫌悪を感じる。そしてこういうしごとにはたざわっているのを徒勞にすぎないようにおもう。しかしそれは校正自体の苦勞ではない。又いつも原稿があつまるのがおそれのために印刷所に原稿をわたすのが出来日前一週間ぐらいになり、したがって校正刷が出はじめるのが二日前になつて、出来日を入れて三日の間に六十四頁の初校再校を見なければならず、しかもちやうどその間に十時間の講義があるので、その三日間は大体しごとでいっぱいという状態になる。ところが印刷所の都合や何かで校正刷が三日にまんべんなく出ず、後半の方にへんぱにもちこまれると、その後半のいそがしさは二倍にも三倍にもなり、結局講義の準備などほつたらかしてやつと

出来の日に間にあわせるということになる。そういう時教場で学生から質問されて、ごまかしきれずにぼろを出したり、誤訳を指摘されて赤面などするのには、他方校正も間ちがいだらけになって、人の非難をまぬかれることはできず、校正はやはり簡単にはできないものだとおもう。しかしそれは校正自体のむつかしさではない。

むしろ私自身自分の校正はそれほどまずくはないとおもっている。ももんがの同人にはいろいろな意味の秀才がいて、それぞれの番附をつくられると私などはいつも下づみになるかもしれないが、そういう秀才にしてもらってもやはりいくつか見おとしがのこって、私が見おとした数と大差がない。誰がやってもかぎられた時間でかぎられた回数しか読むことができなければ結局このくらいにしかできないだろうとおもう。

しかし単行本を出版するとなると大分事情がちがう。単行本は期日を厳格にまもるよりも、校正に厳密を期しなければならぬだろう。私の本を出版する機会はとうにきていたのに、一年のばし二年のばししていたのはひとつはその実行に不安をいだいたためであった。私はこの二三年毎年からだのどこかに故障ができ、学校のことと、雑誌の編輯発行以外のことには手をのばすのをあやぶんだ。

しかしその危惧はむしろ単行本の頁数からきていて、雑誌の何倍かの頁数を本を出すまでいそいで見つけなくてはならないというところにあつただろう。だから若し集中的にすることさえさけることが出来、雑誌の時より数回多く読めば、それほど苦勞もせずに誤植を完全になくすことができるだろうと思つた。事実雑誌のときでも都合よく三度も四度も見ることできた時は誤

植は一つか二つにすぎなかった。その一つか二つを、あと二三度くりかえし読んで見つけるといふことはそれほど実現不可能ではなさそうにおもわれた。

今年の冬いよいよ本を出すことにきめたとき私はOという旧友を思い出した。Oは頭脳緻密で学生時代から外国語がよくできた。学徒出陣で将校になったが、謀略機関のしごとをしていたため戦後公職追放となつて官庁につとめることができなくなつた。それで翻訳や校正をしたりしてすごしてきたが、追放解除になつても、すでに機を逸してしまつたためにやはり翻訳や校正をつづけるよりほかしごとがなかつた。その校正専門家のOが今ひきうけてくれれば誤植を皆無にすることができるとおもつたのである。

Oに早速依頼のはがきを出した。はがきには上下二巻で千枚ちよつとこえるという大体の枚数と今年末から明年の四月までという大体の期限とを書いて、謝礼のこともさしさわりのないよう尋ねておいた。Oから折返し承諾の電報がきて、翌日次のような質問状がきた。

一、自家出版かどうか。自家出版でないとしたら出版屋ほどの程度まで校正にくちばしを入れるか。

二、自分の担当するのは第何校のいかなる部分（初校を原稿とひきあわせる、再校を初校とひきあわせる、別刷に目をおして気のついたところに書きこみをし、それを君なり出版屋なりが本刷を校正する際の参考にするなど）か。分担さえはつきりしていれば自分はどうでもかまわな  
い。

三、郵便事故のおそれはないか（とくに年末年始）。ほかに連絡方法はないか。速達書留にしてもかなりおくれる場合があるし、原稿を郵送することは目方もはるしいたむおそれもあるのだからあまり感心できない。印刷所が神田附近にあれば自分が君の代理としてとりに行ってもよい。

四、謝礼は以前の借金の五百円を帳消ししてもらい、そのほか二千元ぐらいでもいいとおもう。ざっと目をとおすだけだったならその二千元は要らない。交通費通信費は別に計算して実費を請求する。

五、出版屋がまだきまらなかつたら名義だけかすところをさがしてはどうか。

右の文はこまかな質問状であるが、私はむしろ〇の頭の緻密さを再確認してほつとしたといい。又謝礼の件の返事では大変安堵したといっている。校正の謝礼の金額は私には見当つかなかったが、大体五千元ぐらいではなからうかと想像した。もつともこの暮から明年の六月まではそれを一度にはらうゆとりができそうになかった。友人をたのんだのもひとつは〇の内職の資となればよいとおもったのも事実であるが、私のほうでも分割払とか延期とかにしてもらえるという打算がはたらいっていたといっている。しかるに相手の要求が私の推定額の半額にすぎなかつたので、私の推定額どおりに払えば相手も満足するだろうと空想した。又校正しているうちに校正料の相場というものもわかるだろうから万一右の金額が相場よりかなり低ければそれはそのとき考えればいいだろうとおもった。

そこで質問状に対する返事を書いた。

一、全面的に自費でもなく、全面的に書肆がひきうけたのでもない。損害を自分が負担すると

いう約束である。書肆は校正には関係しない。

二、君に担当してもらいたいのは初校と原稿をひきあわせ、再校三校も前校とひきあわせ、気のついたところを注意してもらうことである。しかし再校以下は会って相談したい。初校は最初に印刷所から君の方におくるようにしたからすみ次第自分の方におくってもらいたい。なおもう一人自分の学校の助手をたのんであるが、君と自分とが主力になってやるようにしたい。

三、郵便事故のおそれは自分にもわからない。印刷所は郊外にあり第一回目とはかく君の方に直送するようにしてある。

四、謝礼の件は君の寛容にあまえて校正期間中毎月一千円おくり、最後に本が出て三ヶ月以内に別に相当額をおくる。交通費通信費は別に請求してもらいたい。とりあえず十二月分一月分として二千円同封する。

私はちょうどそのころIさんという懇意の人に就職のことをたのまれていてゆっくり手紙を書いている時間がなかつたので、質問の要求に対する最小限度の返答をして、手紙では意がつくせないから会って話したい、二十五日以後の日時を指定してくれば待つているということをつけくわえた。Oは以前によく私の家に遊びにきたことがあったからである。

私はこの返事を書きながらやはり校正というしごととは厄介なことになるかもしれないと感じた。それは私の予期しないこまかな質問状がその奥に労役にも似たしごとがよこたわっているということを感じしめたのかも知れない。とにかくOの方が校正に関しては私よりも玄人であり、Oの手紙から誘発させられる予感ほ軽視できないだろうとおもった。

いよいよ原稿を書肆に手わたしてからはるか前方に何か重々しいものがよこたわっているような気がしたが、それでもとにかくまだ日常の日々がつづいていた。いつのまにか寒くなつて私の出講しているB市の学校の研究室にも火がはいりようになった。毎年十二月になると大きな金火鉢がすえられ、小使が毎日炭火をはこんでいたが、今年はその火鉢がはいらず、知らぬまに円筒型のプロパンガスの燧炉がはいって、室のすみにプロパンガスのボンベがおいであつた。T教授がいつのまにかたのんだものであつた。しかし私はつけ方をしらないので自分で火をつける気になれず、時たま教授があつてゐる時に行くわしても、人がいるところでは何もする気にならないので、すぐ室を去つて、そのあたれたかさを享受することはなかつた。

Iさんの就職のことも二三旧師に紹介してみたがなかなかうまくゆきそうになかつた。そのうち一二の同僚から君にたのむといつて就職の件を持ちだされるので、誰のことかとおもうと、それがやはりIさんのことであつた。Iさん一家とは私の方が懇意なのに、同僚をとおして私にたのんできたのは、Iさんの家族がいろいろの人にたのみ、結局私とIさんとが学校がおなじだといふので、その人達が又私のところにたのんできたのである。私は結局校正のしごとののはじまる前に、D市の教授をたずねて依頼することにし、Oに二十五日以後きてほしいといつてあつたのを二十七日以後といふことに変更した。そうするよりD市行の日程がとれなかつた。

二十六日になつて私はD市から帰つてきたが、Oからは何の連絡もきていらず、M書肆から最初の十六頁ほどの見本刷がきていた。年末から年始にかけての休暇を十分に利用しようという予定が期待はずれになりそうであつた。大晦日もまぢかにせまつて年賀状を書きはじめた。たのんで

あつた餅もきて、部屋部屋の掃除をした。そこにもうあきらめていたOから速達便がきた。三十日であつた。

それには年内の訪問はとりやめる、年末年始は君の家には訪問客が多いだろうから遠慮するとあつて、そして君の先の手紙には書肆としか書いてなく、出版元を故意にかくしていた、先便にいたつてはじめてM書肆という名があらわれてびっくりした、それまでの十日ばかりの間に自分はM書肆に何回も行つていたのに君がなぜか出版元の名を秘めていたために、出版元とひとことも話しあうこともできずに時間を空費したとあつた。私はおどろいて先のOからきた質問状をとり出して見たが、それには自費出版かどうかという問いあわせがあるだけで出版元はどこかということは書いてなかつた。私は先方の緻密な質問方法に応じてつとめて冗舌をさけ、必要にして十分なる答弁をしようとして単に書肆と書いたままであつた。それは書店と書いても書房と書いてもよいもので、M書肆の省略の意味で書いたものではなかつた。

それからOは、自分に対する礼儀からも出版元の名はあかさすべきものだとかえし書いていたが、Oの質問状は最初から儀礼的なニュアンスはなく、明確に事務的なものであつた。もともと我々友人のあいだでは儀礼的なものは事務的なものの行間字間にひそませておくべきものだったはずである。そして書肆の名は必要な時にいずれわかることであり、かくしてもかくしおおせるものではなく、又私としてはかくすいわれのないものであつた。

それから又Oは、郵便事情のことを質問したのに対してよくわからないといつてきたが、自分の著書の成否が郵便事情にかかっているのに少しのんきすぎはしないかと書いていた。しかし郵

便遅滞の原因は全通ストライキにあるし、この原因をどうこうするということは局外者の私個人の力のおよばないことである。郵便を利用するかどうかという途がのこされているだけだが、それは会っておたがいの細かい都合をきかなければわかることではなかった。

それから又Oは、二十五日以後の訪問の期日を一方的に二十七日以後とあらためてきたが、そんな気まぐれではこまると書いていた。これはOのいうとおりで、Oに責められてもいたしかたないことであつた。

それから又Oは、校正刷を三度にわけて送ってきた次第をこまかにしるし、一度目は印刷所から送つてくると君の手紙に書いてあつたが、二度目からは約束違犯であるし、おなじ校正刷を三通も送ってきたのでは、一通は自分が目をとおすとしてもあとの二通をどうしてよいかわからず、とにかく四百五十枚の原稿と二百七十二頁の校正刷をかかえてすこぶる憂鬱である、君のところへ送るにしても荒物屋に行つてつみ紙やひもを買つてきて包装し、それを又郵便局に持つて行つて書留速達小包にしなければならぬが、そういうことは校正ではなくて校正に附帯する校正事務である、校正と校正事務とはちがう、自分は校正はひきうけたが、校正事務はひきうけたおぼへはないから、校正事務のための助手を別においたらいいだろう、とにかく君自身の著書だから著書が出るまで都内の電話のある家に下宿するなり、連絡所か事務所を設けるなりしてもらいたいとあつた。

これはどう解釈したらよいか。第一に手落ちはどこにでもあるもので、最初から手落ちばかりを責めていたのではどんな共同事業でもなりたたないのではあるまいか。共同事業ではおたがい

に寛容が必要なのに、それを無くしたのはどういふことであろうか。第二に校正と校正事務とをわけて、そしてそれをもととして契約違反を責めてきているが、このようにしごとを細分することは、資本の潤沢な者には可能であつても、小資本者には困難であろう。今Oが私が裕福ではないといふことを知っていて、それをせよといつてせめてきているのは、このしごとがかなり骨の折れることなので、たとい無理をしてもあえて分離せねば遂行できないといふことなのだろうか。そして私はそれに気がつかないほど迂闊だったのだろうか。それともO自身がものぐさ屋で校正事務などといつてそういうことをいやがったのであろうか。それはどちらかわからなかつたが、とにかくにわかには前途に暗雲がたちこめたような感じがした。そこですぐ私は正月の二日にあいたいといつて場所を指定して電報をうった。面会は二日前に指定せよとあつたからそれにしたがつたのである。

追つて三十一日大晦日の日にOからはがきがきて、本日(三十日)印刷所から上巻ののこりの分の校正刷と原稿を送つてきて、これで全部送つてきたことになる、その間終始自分の宛名がまちがつていて郵便配達夫に迷惑をかけ、心労のためすっかり健康を害した、しごと以外のことでもこんなにいらいらさせられてはやりきれない、下巻の校正はおことわりするからそのつもりで、なお健康状態がわるいから当面会謝絶とし、来信にも返事を出さないからそのつもりで、もとと君がわるいのだからがまんしてくれたまえといつてきた。

宛名はあとでM書肆に行つてしらべるとM書肆の名簿が一字まちがっていた。これは私がまちがえたのか、M書肆でうつしちがえたかわからぬがとにかくこちらの手落ちである。しかしそれ

にしても一旦ひきうけたことを一方的に面会謝絶といたり来信にも返事を出さないといつてきたのではどうすることもできない。これはOに依頼したことそれ自身がまちがっていたとおもい、すぐ校正刷と原稿とをこちらに送ってくれるように速達を出した。そしてにわかに重い負担が一身にかかってくるのを感じた。

ガス煖炉の栓をひねってマツチをつけると、ぱつという風船のはじけるような音をたてて炎がはじける。ガスがもれ出ているのを知らずにマツチをつけ、火があたり一面にはじめて顔じゅうやけどをしたという知人の顔を知っているので、研究室のプロパンガスの煖炉に火をつけるのをためらっていたが、ある日とうとうおもいきって火をつけた。そうして椅子を二つよせ一つに腰をおろし一つに足をなげ出していると、次第に身体があたたまってきた。研究室にはほとんど誰もこない。すみには電話の受話機があったが、めったにかかかってこないのですらわされることはない。そこでしばらく校正刷をみると、煖炉のうえにかけていた湯わかしがたぎってきて湯気がたちのぼった。それでお茶をいれた。そして濃いお茶のみながら校正刷をみると不思議に気分がおちついてきて一時間に十六頁の校正がらくにできた。そしてここでこうして校正をみている時の心の状態が幸福なのではないかとおもった。すくなくとも時のたつのを意識しない状態であり、この状態からはなれるとすぐ又そこにかえりたいという郷愁をおぼえる状態であった。私はいつのまにか科学者になって実験室にこもって実験をしているような錯覚にとらわれた。

【解題】収録作品を読む／編者・高橋輝次

私はフリーの編集者として、二〇一三年にちくま文庫から編著『増補版 誤植読本』を出していただいた（元本は東京書籍刊）。これは、元本に再び光を当てて下さった若い編集者の企画力のおかげである。誤植や校正について書かれた五十三人の文学者たちのエッセイを集めたアンソロジーなのだが、本書は出してみると、類書が殆どないせいとか、私の本にしては珍しく予想以上に好評で、現在三刷まで出ている。それで、このテーマへの関心がジャーナリズム・出版関係者や物を書く人たちだけでなく、もっと広い読者層にも根強くあることを改めて実感した。もちろん、好評の原因は私の企画力というより、収録した錚々たる文学者たちの文章力によることは言うまでもない。

実はその本のあとがきにも書いたのだが、エッセイと並行して、校正や誤植をテーマにしたリ、キーポイントとなる小説も、趣味の古本漁りのかたわら長年探求してきて、大分蒐まったので、いずれそれらをまとめて出版できたら、というのが近年の念願になっていた。出版状況がますます厳しくなる現在、それもなかなか困難だったが、今回、小田光雄氏らを始めとする出版史や古書に関する本を多く出していて、本書にふさわしい論創社からようやく出版できることになり、大へんうれしく思っている。

なお、本書には小説に加え、その後目に止ったものの、ちくま文庫に収録できなかったエッセイも数篇、収録することにした。小説にしろエッセイにしろ、じっくり味わってもらえばどれも面白い作品ばかりなので、私の解説など蛇足とは思いますが、編者の責任上、各々の作品への私なりの感想やその周辺を補足して、読者の参考にしていただけたら幸いである。

\*

まず、河内仙介の「行間さん」から。小説の冒頭は『大正』から『昭和』になって、間もなくの時代だった。／その頃行間ぎょうかんさんは、牛込の、ある文芸図書出版社しゅしに附属した印刷工場の校正係だった」という文章で始まっている。この出だしからして、私などは「ほお、この出版社って、どこのことだろう？」とつい引き込まれてしまう。牛込の、とあるから実在した出版社に係した小説の可能性があるからだ。それに、この小説の主人公は作家志望だし、大阪出身ともあるので、これは自伝的小説かもしれない、と思う。それで、河内仙介の詳しい経歴が分れば『日本近代文学大事典』を繰ってみたが、数行立項されているものの、職歴などは全く記されていない。

そこで、友人に頼んでネットでプロフィールを検索してもらったところ、河内氏は親友で大阪出身の劇作家、北条秀司の紹介で大衆文学の大御所、長谷川伸に師事し、(その関係からだろう)新小説社に勤める、とあった！ この新小説社は大正五年、十三歳で春陽堂に小僧として入り、大正十三年から春陽堂の出版部に勤めていた島源四郎氏が昭和八年に独立してつくった出版社で、

長谷川伸、子母沢寛、川口松太郎、里見弴、久保田万太郎などの作品を小村雪岱を始めとする画家の見事な装幀で出した所だ。これらの本は今でも古書ファンに人気がある。ちなみに島氏は春陽堂や新小説社での経験を昭和五九〜六〇年、「日本古書通信」に「出版小僧思ひ出話」のタイトルで十二回にわたって連載している。この中でも、とくに長谷川伸氏の、苦境にある島氏への温かい援助と協力を回想した所には感銘を受ける。これは出版史の貴重な証言であるにもかかわらず単行本になっていないのではないか。

いずれにせよ、この小説の主人公の校正係は河内氏自身ではないにしても、氏の出版社勤めの経験が色濃く投影された作品と言えらると思う。なお、ネットには、里見弴の短篇「文学」の主人公のモデルにもなっている、とあったので（但し、これは里見氏の自伝的随筆にでも記されているのだろうか、出典は不明である）、手元にたまたま昔、古本で入手した所蔵の『文学』（小山書店、昭和十五年）所収のその作品を読んでみたが、かなりフィクション化されて描かれているようだ。ただ、河内氏が里見氏のところへ出入りして世話になり、書いた小説原稿も見せていたのは事実のようで、この小説中に引かれている草稿は河内氏が提供したものと思われる。里見氏とは家族ぐるみのよきつきあいでありながら、草稿は里見氏からあまりよい評価を受けなかったことがそこで描かれている。

河内氏は昭和十五年『軍事郵便』で直木賞を受賞しているが、現在では殆んど忘れられている作家ではなからうか。しかし、この短篇を読めば、実にテンポのよい、ユーモア感あふれる文体で、ぐんぐん引き込まれてしまう。さすが、直木賞をとった作家だけある、と思わせられる。



「行間さん」という校正にちなむあだ名のタイトルも面白い。好人物だった「行間さん」が職場のふとした女性関係のうわさがきつかけで、しだいに荒れて人格が変貌してゆく様が巧みに描かれており、最後は細君や兄の愛情を再確認するところで終っている。まるで落語の人情話の一席を聴くような味わいがある。

この作家の漢字のルビの付け方も独特で、例えば徹夜を「よつびて」、唐突を「だしぬけ」、道化役を「さんまいめ」、挙措を「ものごし」、骨肉を「しんみ」などと付けている。

私はこの機会に、この作品が収録されている『わが姉の記』（泰光堂、昭和十七年）の短篇も二、三読んでみたが、「世紀の朝」や「鬼女」にはやはり河内氏を思わせる作家が登場しており、これらも自伝的小説かと思われる。もし事実に基づいているとすれば、河内氏は様々な職業に就くかたわら、出版社には企画参与の形で隔日に二、三時間出勤していたという。なお、同書収録の「螢合戦」は源氏螢の保護育成に力を入れている滋賀の野州郡で、餅屋の主人が家業そっちのけで土地の人々の嘲笑を浴びながらも、螢の光源の研究に日夜必死にうちこむ姿を螢の群の夢幻的な描写とともに活写していて、印象深い作品であった。私は文芸文庫あたりで河内氏の作品集を復刊してくれないだろうかと期待しているのだが。

〔底本一覽〕

- 河内仙介「行間さん」（泰光堂『わが姉の記』昭和十七年刊）  
和田芳恵「祝煙」（泰光堂『作家達』昭和十七年刊）  
上林暁「遺児」（河出新書『入社試験』昭和三十年刊）  
佐多稲子「祝辞」（筑摩書房『日本短篇文学全集31』昭和四十三年刊）  
倉阪鬼一郎「赤魔」（幻冬舎文庫『田舎の事件』平成十一年刊）  
小池昌代「青いインク」（ちくま文庫『感光生活』平成十九年刊）  
川崎彰彦「芙蓉荘」の自宅校正者」（編集工房ノア『夜がらすの記』昭和五十九年刊）  
田中隆尚「爐邊の校正」（河出書房新社『桃園譜』昭和五十六年刊）  
木下夕爾「わが若き日は恥多し」（福山文化連盟『含羞の詩人 木下夕爾』昭和五十年刊）  
吉村昭「で十条」（文春文庫『私の引出し』平成八年刊）  
杉本苑子「校正恐るべし」（中公文庫『片方の耳飾り』昭和五十九年刊）  
杉浦明平「アララギ校正の夜」（筑摩書房『明平、歌と人と逢う』平成元年刊）  
落合重信「校正」（神戸史学会『歴史と神戸』昭和五十三年十二月発行）  
宮崎修二郎「植字校正老若問答」（『階段』四十～四十一号）  
大屋幸世「助詞一字の誤植―横光利一のために―」（朝日書林『書物周遊』平成二年刊）  
河野與一「正誤表の話」（岩波書店『文庫』昭和二十七年七月号）